

はじめに

- 1 J・S・ミルは「改善の精神は、必ずしもつねに、自由の精神であるわけではない」(J・S・ミル『自由論』関口正司訳、岩波文庫、2020年、KindleEdition,p.113)と語る。国家や社会は、改善の名のもとに個人に干渉したり、科学的根拠のない要請を押し付けてくることがある。社会進化論にもとづく優生学やマルクス主義が、進歩的な科学的議論として信奉されていた時代があるように、根拠のない「アップデート」には注意する必要がある。

1章 不適切な振る舞いとは何か？

- 1 <https://www.nytimes.com/2018/06/19/magazine/inappropriate-behavior-could-mean-a-faux-pas-or-a-crime.html>
- 2 同上
- 3 Norris, P. (2023). *Cancel culture: Heterodox self-censorship or the curious case of the dog-which-didn't-bark*. Faculty Research Working Paper Series, Harvard Kennedy School.
- 4 カロリーヌ・フレスト『「傷つきました」戦争：超過敏世代のデスロード』堀茂樹訳、中央公論新社、2023年、Kindle Edition, p.6
- 5 Mounk, Y. (2023). *The identity trap: A story of ideas and power in our time*. Penguin Press.
- 6 Lilla, M. (2018). *The once and future liberal: After identity politics*. C. Hurst & Co. Publishers Ltd.
- 7 ジョナサン・ハイト、グレッグ・ルキアノフ『傷つきやすいアメリカの大学生たち：大学と若者をダメにする「善意」と「誤った信念」の正体』西川由紀子訳、草思社、2022年、Kindle Edition, p.23
- 8 ジョナサン・ハイト、グレッグ・ルキアノフ、Kindle Edition, p.55
- 9 五十嵐彰、迫田さやか『不倫—実証分析が示す全貌』中公新書、2023年、Kindle Edition, p.69
- 10 <https://www.pewresearch.org/short-reads/2014/04/15/whats-morally-acceptable-it-depends-on-where-in-the-world-you-live/>
- 11 Report of the Committee on Freedom of Expression:<https://provost.uchicago.edu/sites/default/files/documents/reports/FOECommitteeReport.pdf>
- 12 J・S・ミル『自由論』関口正司訳、岩波文庫、2020年、Kindle Edition, p.19
- 13 ただしミルは、無条件に愚行権の尊重を求めるわけではない。成熟した判断能力や十分な情報や知識がない場合の選択には、介入の余地があり、この点からミルをソフトなパターナリズムとする解釈もある。またミルは、奴隷になる自由（自由を放棄する自由）は認めていないという有名な一節も存在する。
- 14 ただし不倫をカント主義や徳倫理などの観点から批判する論者もいる。また不倫が、配偶者の重要な選択（性的健康、経済決定、家族計画）に影響を及ぼし、その観点から配偶者の自律的決定を損なうという意味で、権利侵害にあたると考える議論もある。たとえば Wasserstrom, R. A. (1974). Is adultery immoral? *The Philosophical Forum*. pp. 513–528.などを参照。

- 15 法哲学者のR・A・ダフが刑法の文脈で示す「公的不正」という概念からアプローチすることもできるが、議論が複雑となるため本書では扱わない。ダフについては、Duff, R. A. (2007). *Answering for crime: Responsibility and liability in the criminal law (Legal Theory Today)*. Hart Publishing. 日本語で読める文献としては、高島麻未「R.A. ダフの公的不正について」『法学研究論集 58号』（2023年）など。
- 16 Feinberg, J. (1988). *Offense to others (Moral Limits of the Criminal Law)*. Oxford University Press.
- 17 <https://digital.asahi.com/articles/A558J2HQXS8JULLI007M.html>
- 18 https://hr.berkeley.edu/sites/default/files/microaggressions._clarification_evidence_and_impact.pdf
- 19 https://homepages.se.edu/cvonbergen/files/2018/05/Microaggressions_Strong-Claims-Inadequate-Evidence.pdf
- 20 たとえば <https://www.theatlantic.com/politics/archive/2015/09/why-critics-of-the-microaggressions-framework-are-skeptical/405106/> など。

2章 何をすれば人権侵害なのか？

- 1 木山幸輔『人権の哲学：基底的価値の探究と現代世界』東京大学出版会、2022年、p.6
- 2 リン・ハント『人権を創造する』松浦義弘訳、岩波書店、2011年、pp.29-43
- 3 ロバート・ノージック『生のなかの螺旋——自己と人生のダイアログ』井上章子訳、ちくま学芸文庫、2024年
- 4 Thomson, J. J. (1971). A defense of abortion. *Philosophy & Public Affairs*, 1(1), pp. 47–66.
- 5 正確に言えば「自然状態」において、各人が好き勝手に振る舞い、それぞれの利害が衝突することと戦争状態に陥るのか、それとも、ある程度の秩序は保たれるのかは、論者によって異なる。
- 6 ジョン・ロックもまた、奴隷貿易への投資をおこなっていただけでなく、植民地経営などにも関与していた。
- 7 <https://www.ohchr.org/en/statements-and-speeches/2022/01/memory-dignity-and-justice>
- 8 Flynn, J. (2012). Human rights in history and contemporary practice: Source materials for philosophy. In C. Corradetti (Ed.), *Philosophical dimensions of human rights* (pp. 3–22). Springer.
- 9 Moyn, S. (2012). *The last utopia: Human rights in history*. Belknap Press.
- 10 Griffin, J. (2008). *On human rights*. Oxford University Press, Kindle Edition, p. 92.
- 11 Griffin, Kindle Edition, p. 92.
- 12 こうした問題設定をすることで、個人の「痛み」を軽視したり、差別主義者による「アレもコレも人権侵害と言われて息苦しい」との主張を助長しているとは非難する人もいるだろう。当然そのことには自覚的であるが、それでも筆者は、人権の範囲を確定することで、その価値の劣化に抗う必要があるというグリフィンらの問題意識に同意する。
- 13 Flynn, J. (2012). Human rights in history and contemporary practice: Source materials for philosophy. In C. Corradetti (Ed.), *Philosophical dimensions of human rights* (pp. 3–22). Springer.

- 14 神谷悠一『差別は思いやりでは解決しない ジェンダーやLGBTQから考える』集英社新書、2022年、Kindle Edition, pp. 3-4
- 15 Small, D. A., Loewenstein, G., & Slovic, P. (2007). Sympathy and callousness: The impact of deliberative thought on donations to identifiable and statistical victims. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 102(2), pp. 143–153.
- 16 尊厳の概念分析をおこなった日本語で読める包括的な著作としては、マイケル・ローゼン『尊厳—その歴史と意味』（内尾太一、峯陽一訳、岩波新書、2021年）。
- 17 ジェームズ・グリフィン（Griffin, J. (2008). *On human rights*. Oxford University Press.）のように、権利の根拠として尊厳を主張する立場には、多くの批判がある。
- 18 ただし思いやりや配慮などを尊厳（尊敬）の問題と結びつける論者もあり、必ずしも「思いやりテーゼ」がすべて問題なわけではない。たとえば Dillon, R. S. (1992). Respect and care: Toward moral integration. *Canadian Journal of Philosophy*, 22(1), pp. 105–132.。
- 19 ただし尊厳の起源に関する議論をすべてカントに帰することは慎重になる必要がある。たとえば Debes, R. (2021). Respect: A history. In R. Dean & O. Sensen (Eds.), *Respect: Philosophical essays* (pp. 1–26). Oxford University Press.。
- 20 日本語訳としては、たとえば大橋容一郎訳『道徳形而上学の基礎づけ』（岩波文庫、2024年）。
- 21 実際には、ここまで単純化された功利主義はほとんど議論されない。日本語で読める功利主義の入門書としては、児玉聡『功利主義入門：はじめての倫理学』（ちくま新書、2012年）がある。
- 22 O'Neill, O. (1990). *Constructions of reason*. Cambridge University Press.
- 23 ただ尊厳という概念を経由することに反対する論者もいる。たとえば生命倫理学者のルース・マックリンは「尊厳は役に立たない概念です。それは、個人またはその自律性を尊重すること以上の意味はありません」と断言する（2003年）。
- 24 グリフィンに関する日本語で読める数少ない研究は、前述した木山幸輔『人権の哲学』（東京大学出版会、2022年）、特に第6章（pp.134-194）がある。
- 25 木山幸輔『人権の哲学：基底的価値の探究と現代世界』東京大学出版会、2022年、p.32
- 26 木山、p.33
- 27 <https://news.un.org/en/story/2023/09/1140882>
- 28 Waldron, J. (2012). *The harm in hate speech (Oliver Wendell Holmes Lectures)*. Harvard University Press, p. 125.
- 29 マイケル・イグナチエフ『人権の政治学』エイミー・ガットマン編、添谷育志、金田耕一訳、風行社、2006年、pp.101-103
- 30 Beitz, C. R. (2009). *The idea of human rights*. Oxford University Press, Kindle Edition, p. 209.
- 31 Beitz, Kindle Edition, p. 212.
- 32 ベイツは、人権の価値を自然権や尊厳から基礎付けようとする「自然主義理論」と、それらがどのように国際社会で機能してきたかという「実践理論」に分けて、後者を擁護する。
- 33 ジョン・ロールズほか『人権について オックスフォード・アムネスティ・レクチャーズ』中島吉弘、松田まゆみ訳、みすず書房、1998年、pp.51-101

34 木山、p.42

3章 差別のない、平等な社会はどう実現するか？

- 1 https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04_00108.html
- 2 <https://www.un.org/womenwatch/uncoordinated/anti-harassment.html#:~:text=Discrimination%20is%20any%20unfair%20treatment,%2C%20ethnic%20origin%2C%20sexual%20orientation%2C>
- 3 「不当な差別」という言葉があるように、差別を区別のようなニュアンスで使うこともあるが、本書では基本的に、差別という用語を「道徳的・倫理的に問題がある区別」という文脈で用いていく。ただし読みやすさのため、文脈に応じて意図して「差別」を用いることもある。
- 4 Scanlon, T. M. (2008). *Moral dimensions: Permissibility, meaning, blame*. Harvard University Press.
- 5 この区分・呼び方に異論もあるだろうが、わかりやすさのために本書ではそのように記述する。
- 6 「女性に差別を受けやすい」ことは一般論であり、国や領域などによって事情は異なる。その際、世界経済フォーラムのジェンダー・ギャップ指数（GGGI）のように意義と限界の両面が指摘される指数だけでなく、ジェンダー不平等指数（GII）などを確認する必要があるものの、大枠でそれを「事実」と言い切ることは問題ないだろう。
- 7 池田喬、堀田義太郎『差別の哲学入門シリーズ・思考の道先案内』アルパカ、2021年、Kindle Edition, p.48
- 8 「黒人」表記への批判もあるが、近年はカリブ海にルーツを持つ人々などへの尊重から「アフリカ系アメリカ人」表記にも疑義が呈され、「black」ではなく大文字を用いた「Black」が提唱されるなど、定着した呼称はない。本書では分かりやすさを重視して、黒人を用いる。
- 9 上杉忍『アメリカ黒人の歴史 増補版：奴隷貿易からオバマ大統領、BLM運動まで』中公新書、2024年、Kindle Edition, p. 32
- 10 <https://www.census.gov/data/tables/2025/demo/income-poverty/p60-286.html>
- 11 <https://www.census.gov/library/publications/2025/demo/p60-287.html>
- 12 <https://bjs.ojp.gov/library/publications/jails-report-series-2024-preliminary-data-release/web-report>
- 13 Lum, K., & Isaac, W. (2016). To predict and serve? *Significance*, 13(5), pp. 14–19.
- 14 <https://www.aclu.org/the-war-on-marijuana-in-black-and-white>
- 15 <https://www.rand.org/research/gun-policy/analysis/essays/methodological-challenges-research-racial-bias-police-shootings.html>
- 16 アイリス・マリオン・ヤング『正義への責任』岩波現代文庫、2022年、岡野八代、池田直子訳、Kindle Edition, p. 317
- 17 ただし、この分類は必ずしもすべての専門家が合意しているわけではない。詳しくは、Lippert-Rasmussen, K. (2017). The philosophy of discrimination: An introduction. In K. Lippert-Rasmussen (Ed.), *The Routledge handbook of the ethics of discrimination*. Routledge.。

- 18 Eidelson, B. (2015). *Discrimination and disrespect (Oxford Philosophical Monographs)*. Oxford University Press. また【思考実験 3-8】は、アイデルソンによる就学前教育の例 (Kindle Edition, p.55) を参照している。
- 19 アイリス・マリオン・ヤング『正義と差異の政治』飯田文雄、荻田真司、田村哲樹、河村真実、山田祥子訳、法政大学出版局、2020年、Kindle Edition, p.273
- 20 Thomson, J. J. (1973). Preferential hiring. *Philosophy & Public Affairs*, 2(4), pp. 364–384.
- 21 <https://www.law.cornell.edu/supct/html/02-241.ZX1.html>
- 22 ただしトーマスの主張は、憲法制定時の意図に固執する原典主義（オリジナリズム）であるとして批判も集めている。たとえば <https://www.nytimes.com/2018/08/02/opinion/contributors/clarence-thomas-supreme-court-conservative.html>。
- 23 南川文里『アフターマティブ・アクション 平等への切り札か、逆差別か』中公新書、2025年、Kindle Edition, p.157
- 24 南川、pp.182-185
- 25 田中将人『平等とは何か：運、格差、能力主義を問ひなおす』中公新書、2025年、Kindle Edition, p. 48
- 26 田中、pp.57-58
- 27 エリザベス・アンダーソン「平等の要件とは何か」『平等主義基本論文集』広瀬巖訳、勁草書房、2018年、Kindle Edition, p.68
- 28 アンダーソン、p.69
- 29 アンダーソン、pp.114-115
- 30 南川、pp. 103-104
- 31 Hellman, D. (2011). *When is discrimination wrong?* Harvard University Press, Kindle Edition, p. 35.

4章 コンプライアンスは誰がどう決めているのか？

- 1 <https://harpersbazaar.com.au/celebrities-who-free-the-nipple/>
- 2 <https://time.com/collection/question-everything/4029632/ina-esco-should-we-freethenipple/>
- 3 たとえば McCann, H. (2020). 'The free-flying natural woman boobs of yore'? The body beyond representation in feminist accounts of objectification. *Feminist Review*, 126(1), pp.74-88. <https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/0141778920944550>
- 4 『月刊国民生活』2001年12月号、pp.49-53
- 5 伊藤昌亮『炎上社会を考える 自衛警察からキャンセルカルチャーまで』中公新書ラクレ、2022年、Kindle Edition, p. 20
- 6 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCD255OV0V20C25A2000000/>
- 7 郷原信郎、元榮太郎『初級 ビジネスコンプライアンス：第3版―「社会的要請への適応」から事例理解まで』東洋経済新報社、2022年、Kindle Edition, p. 11
- 8 先駆的な議論としては、1930年代のバール・ドッド論争がある。
- 9 Bowen, H. R. (2013). *Social responsibilities of the businessman*. University of Iowa Press, Kindle

Edition, p. 7.

- 10 Carroll, A. B. (1991). The pyramid of corporate social responsibility: Toward the moral management of organizational stakeholders. *Business Horizons*, 34(4), pp. 39–48.
- 11 <https://www.nytimes.com/1997/04/04/opinion/l-nike-s-workplace-abuses-violate-civil-rights-450006.html>
- 12 <https://www.industrialunion.org/rana-plaza-brands-must-pay-compensation-by-9am-on-24-april>
- 13 <https://time.com/6959174/culture-war-corporate-america-esg>
- 14 <https://www.un.org/unispal/document/a-hrc-59-23-from-economy-of-occupation-to-economy-of-genocide-report-special-rapporteur-francesca-albanese-palestine-2025/>
- 15 <https://www.washingtonpost.com/business/interactive/2025/dei-companies-sec-filings16>
- Macchi, C. (2019). The normative foundation of the corporate responsibility to respect: A critical analysis. In D. Russo (Ed.), *Business, human rights and the environment: The evolving agenda* (pp. 45–61). Editoriale Scientifica.
- 17 Ruggie, J. G. (2017). *The social construction of the UN Guiding Principles on Business & Human Rights*. Faculty Research Working Paper Series, Harvard Kennedy School.
- 18 Sen, A. (2004). Elements of a theory of human rights. *Philosophy & Public Affairs*, 32(4), pp. 315–356.
- 19 <https://erb.umich.edu/2023/09/07/how-can-business-prioritize-justice-two-student-researchers-weigh-in/>
- 20 Gibson, K. (2007). *Ethics and business: An introduction (Cambridge Applied Ethics)*. Cambridge University Press, Kindle Edition, p. 171.
- 21 ケビン・ギブソン（2023年）は、報復的正義や回復的・修復的司法の概念によって説明している。
- 22 <https://www.nytimes.com/1970/09/13/archives/a-friedman-doctrine-the-social-responsibility-of-business-is-to.html>
- 23 Freeman, R. E., & Reed, D. L. (1983). Stockholders and stakeholders: A new perspective on corporate governance. *California Management Review*, 25(3), pp. 88–106.
- 24 最近の研究としては、Orts, E. W., & Smith, N. C. (Eds.). (2017). *The moral responsibility of firms*. Oxford University Press.。
- 25 Sen, A. (2009). *The idea of justice*. Penguin Books Ltd, Kindle Edition, pp. 135–136.

5章 ポリティカル・コレクトネスは「行き過ぎ」なのか？

- 1 <https://x.com/katepanda2/status/1183729350207623169>
- 2 <https://mainichi.jp/articles/20240109/k00/00m/040/109000c>
- 3 <https://www.sankei.com/article/20230521-6COMX4B2VPPYFNDYJCENHZAK4/>
- 4 倉持麟太郎『リベラルの敵はリベラルにあり』ちくま新書、2020年、Kindle Edition, p. 76
- 5 麻布競馬場『令和元年の人生ゲーム』文藝春秋、2021年、Kindle Edition, p.161

- 6 清水晶子、ハン・トンヒョン、飯野由里子『ポリティカル・コレクトネスからどこへ』有斐閣、2022年、Kindle Edition, p.3
- 7 清水、p.156
- 8 清水、p.156
- 9 <https://archive.nytimes.com/www.nytimes.com/live/republican-debate-election-2016-cleveland/trump-on-political-correctness/>
- 10 https://www.facebook.com/photo.php?fbid=1015828152482572&id=153080620724&set=a.48885220724&locale=ja_JP
- 11 詳しくは、石田健『カウンターエリート』（文春新書、2025年）。
- 12 https://withnews.jp/article/f0180406003qq00000000000000W03j10101qq000017134A?ref=list_sp
- 13 ただし1964年には、リンドン・ジョンソン大統領が全米自動車労働組合大会で「私は皆さんに、政治的に正しいから（politically correct）ではなく、正しいから（right）こそ、必要なことを行うつもりだと伝えるためにここにいます。私たちは、夏の間ずっとかかっても、公民権法案を可決するつもりです」と演説している。ジョンソンのいう「正しい」は道徳的な意味合いであり、「政治的正しさ」は否定的な意味で用いられている。
- 14 Berman, P. (Ed.). (1995). *Debating P.C.: The controversy over political correctness on college campuses*. Random House Publishing Group, Kindle Edition, p. 5.
- 15 Safire, W. (2008). *Safire's political dictionary (Revised)*. Oxford University Press.
- 16 Hall, S. (1994). Some "politically incorrect" pathways through PC. In S. Dunant (Ed.), *The war of the words: The political correctness debate* (pp. 164–184). Virago Press.
- 17 <https://www.nytimes.com/1990/10/28/weekinreview/ideas-trends-the-rising-hegemony-of-the-politically-correct.html>
- 18 <https://www.youtube.com/watch?v=01kX1WGdJWc>
- 19 ジョナサン・ハイト、グレッグ・ルキアノフ『傷つきやすいアメリカの大学生たち：大学と若者をダメにする「善意」と「誤った信念」の正体』西川由紀子訳、草思社、2022年、Kindle Edition, p. 372
- 20 Fairclough, N. (2010). *Critical discourse analysis: The critical study of language (2nd ed.)*. Routledge.
- 21 <https://websekai.iwanami.co.jp/posts/2828>
- 22 <https://www.mdpi.com/2076-0760/7/12/245>
- 23 <https://gendai.media/articles/-/86381?page=3>
- 24 清水晶子、ハン・トンヒョン、飯野由里子『ポリティカル・コレクトネスからどこへ』有斐閣、2022年、Kindle Edition, p.156
- 25 Mounk, Y. (2023). *The identity trap: A story of ideas and power in our time*. Allen Lane, Kindle Edition, p. 14.
- 26 ダグラス・マレー『大衆の狂気 ジェンダー・人種・アイデンティティ』山田美明訳、徳間書店、

- 2022年、Kindle Edition, p. 27
- 27 <https://www.youtube.com/watch?v=S6-UC8yr0Aw>
- 28 <https://rapp.spia.princeton.edu/how-effective-is-unconscious-bias-training-a-comprehensive-evaluation-of-recent-assessments>
- 29 <https://www.scientificamerican.com/article/the-problem-with-implicit-bias-training>
- 30 J・S・ミル『自由論』関口正司訳、岩波文庫、2020年、Kindle Edition, pp.29-30
- 31 ハイト、p.359
- 32 Dworkin, R. (2009). Foreword. In I. Hare & J. Weinstein (Eds.), *Extreme speech and democracy*. Oxford University Press.
- 33 ジェレミー・ウォルドロン『ヘイト・スピーチという危害』谷澤正嗣、川岸令和訳、みすず書房、2015年、Kindle Edition, p. 232
- 34 金慧「デモクラシーと表現の自由—表現の規制は民主的正統性を握り崩すのか」『年報政治学』2024年11月、pp.354-375
- 35 このアイデアは、Levy, J. T. (2014). *Rationalism, pluralism, and freedom*. Oxford University Press. から来ている。Levyは、リベラリズムを「合理主義（rationalism）」と「多元主義（pluralism）」の緊張関係によって特徴づける。
- 36 <https://bleedingheartlibertarians.com/2016/03/safe-spaces-academic-freedom-and-the-university-as-a-complex-association/>
- 37 https://watermark02.silverchair.com/book_9780262343664.pdf

6章 女性を褒めることは適切なのか？

- 1 <https://www.nytimes.com/2017/10/05/us/harvey-weinstein-harassment-allegations.html>
- 2 たとえば『ハッシュタグだけじゃ始まらない 東アジアのフェミニズム・ムーブメント』など。
- 3 https://tansajp.org/investigativejournal_category/kakusan/
- 4 清水晶子『フェミニズムってなんですか？』文春新書、2022年、p.11
- 5 田中東子「感じのいいフェミニズム：ポピュラーなものをめぐる、わたしたちの両義性」『現代思想』2020年3月臨時増刊号「総特集＝フェミニズムの現在」、青土社、pp.26-35
- 6 パトリシア・ヒル・コリンズ、スルマ・ビルゲ『インターセクショナルリティ』小原理乃、下地口一レンス吉孝訳、人文書院、2021年、Kindle Edition, p. 18
- 7 <https://archive.nytimes.com/opinionator.blogs.nytimes.com/2015/10/15/a-feminism-where-leaning-in-means-leaning-on-others/>
- 8 Sandberg, S. (2013). *Lean in: Women, work, and the will to lead*. Alfred A. Knopf.
- 9 https://www.theguardian.com/commentisfree/2013/oct/14/feminism-capitalist-handmaiden-neoliberal?CMP=twl_tu
- 10 Maker, Y. (2022). *Care and support rights after neoliberalism: Balancing competing claims through policy and law*. Cambridge University Press.
- 11 Maker, Y. (2022). *Care and support rights after neoliberalism: Balancing competing claims*

土社、Kindle Edition, p.314

- 10 ルッキズムと認識的不正義については、Spiegel, T. J. (2023). Lookism as epistemic injustice.
Social Epistemology, 37(1), pp. 47–61.。
- 11 Takáč, P. (2020). Current issues in aesthetics and beyond: Revisiting lookism. *Ethics & Bioethics*,
 10(1–2), pp. 59–68.
- 12 Mason, A. (2023). *What’s wrong with lookism?: Personal appearance, discrimination, and
 disadvantage (New Topics in Applied Philosophy)*. Oxford University Press, Kindle Edition, p. 58.
- 13 Tietje, L., & Cresap, S. (2005). Is lookism unjust?: The ethics of aesthetics and public policy
 implications. *Journal of Libertarian Studies*, 19(2), pp. 31–50.
- 14 西倉実季、堀田義太郎「外見に基づく差別とは何か」『現代思想』2021年11月号「特集＝ルッ
 キズムを考える」青土社、Kindle Edition, pp.22-23

8章 「日本人ファースト」は不適切なのか？

- 1 https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00047.html
- 2 望月優大『ふたつの日本「移民国家」の建前と現実』講談社現代新書、2019年、Kindle Edition、
p.5
- 3 <https://medium.com/@notoxenophobia.election2025>
- 4 <https://kokkai.ndl.go.jp/txt/119804601X00720190307/239>
- 5 <https://www.washingtonpost.com/news/morning-mix/wp/2016/01/15/that-vexing-natural-born-citizen-requirement-what-were-the-founding-fathers-afraid-of/>
- 6 <https://www.cbsnews.com/news/cbs-news-poll-should-us-presidents-be-natural-born/>
- 7 一橋大学社会学部貴堂ゼミ生 & 院ゼミ生有志『大学生がレイシズムに向き合って考えてみた【改訂版】——差別の「いま」を読み解くための入門書』明石書店、2023年、Kindle Edition, pp. 37-38
- 8 小熊英二『単一民族神話の起源—「日本人」の自画像の系譜』新曜社、1995年
- 9 https://www.bpo.gr.jp/?p=10866&meta_key=2021
- 10 https://houmukyoku.moj.go.jp/saitama/page000001_00440.pdf
- 11 <https://survey.gov-online.go.jp/hutai/r04/r04-ainu/2.html#midashi2>
- 12 <https://reconciliation.waseda.jp/wakaidict/1399/>
- 13 一般社団法人共同通信社『記者ハンドブック 第14版 新聞用字用語集』共同通信社、2022年、Kindle Edition, p. 740
- 14 百瀬響『北海道旧土人保護法の成立と変遷の概要』『史苑』55 (1)、立教大学史学会、1994年、pp.64-86
- 15 上野昌之『近代アイヌ差別の発生についての考察』『早稲田大学大学院教育研究科紀要』別冊 19 (2)、早稲田大学大学院教育学研究科、2011年、pp.37-48
- 16 佐々木千夏『現代におけるアイヌ差別』『調査と社会理論』研究報告書 35 先住民族多住地域の社会的総合研究—札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象にして—、北海道大

- 学大学院教育学研究科教育社会学研究室、2016年、pp.45-70 / 佐々木千夏「アイヌ・非アイヌの人々が語る差別の諸相」『北海道アイヌ民族生活実態調査報告その6』アイヌ民族多住地域調査報告書、2018年、pp.125-135
- 17 『最新アイヌ学がわかる』佐々木史郎、北原モコツウナシ、エイアンドエフ、2024年、p.37
- 18 2008年、衆参両院で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択されたことで、町村官房長官（当時）の談話によって、アイヌを先住民族と認める認識は示されていた。
- 19 『最新アイヌ学がわかる』佐々木史郎、北原モコツウナシ、エイアンドエフ、2024年、p.146
<https://www.courts.go.jp/assets/hanrei/hanrei-pdf-93129.pdf>
- 21 塩出浩之「琉球処分「沖縄問題」の原点」中公新書、2025年、Kindle Edition, p. 262
- 22 「本土」という表現には、植民地主義にもとづく差別的な意味合いが含まれる。しかし本書では、読みやすさを優先してこの表現を用いる。
- 23 安里長従、志賀信夫『なぜ基地と貧困は沖縄に集中するのか?』堀之内出版、2022年
- 24 https://www.pref.okinawa.jp/_res/projects/default_project/_page_001/007/967/kodomonohin_kontaisakukeikaku0403.pdf
- 25 安里長従、志賀信夫『なぜ基地と貧困は沖縄に集中するのか?』堀之内出版、2022年、Kindle Edition, p.12
- 26 安里、志賀、p.139
- 27 安里、志賀、p.140
- 28 新崎盛暉『沖縄現代史 新版』岩波新書、2025年、Kindle Edition
- 29 在日コリアン以外にも、在日朝鮮人や在日韓国・朝鮮人などのさまざまな呼び方があり、朝鮮半島の南北分断などの歴史的背景を踏まえた議論なども盛んになっている。本書では、特別な文脈がない限り、在日コリアンという呼び方に統一する。
- 30 <https://www.nhk.or.jp/minplus/0018/topic058.html>
- 31 <https://mainichi.jp/articles/20230901/ddl/k30/040/315000c>
- 32 ミン・ジン・リー『パチンコ』上、文春文庫、2023年、Kindle Edition, p.261
- 33 文京洙『在日朝鮮人問題の起源』クレイン、2007年、p.3
- 34 水野直樹、文京洙『在日朝鮮人 歴史と現在』岩波新書、2015年、Kindle Edition, p.126
- 35 李飯成『砵をうつ女』文春文庫、1977年、Kindle Edition, p.153
- 36 平野千果子『人種主義の歴史』岩波新書、2022年、Kindle Edition, p.7
- 37 エリック・ウィリアムズ『資本主義と奴隷制』中山毅訳、ちくま学芸文庫、2020年
- 38 オレリア・ミシエル『黒人と白人の世界史——「人種」はいかにつくられてきたか』児玉しおり訳、明石書店、2021年
<https://digital.asahi.com/articles/AST5F1JLCT5FUPQJ00PM.html>
- 40 Marshall, T. H., & Bottomore, T. (2014). *Citizenship and social class*. Pluto Press.
- 41 Kymlicka, W. (1995). *Multicultural citizenship: A liberal theory of minority rights (Oxford Political Theory)*. Oxford University Press, Kindle Edition, pp. 17–18.
- 42 ウィリアム・キムリッカ『新版 現代政治理論』千葉真、岡崎晴輝訳、日本経済評論社、2005年、

- p.476
- 43 たとえば Taylor, C. (1994). The politics of recognition. In A. Gutmann (Ed.), *Multiculturalism: Examining the politics of recognition* (pp. 25–73). Princeton University Press.。
- 44 <https://www.theguardian.com/politics/2004/feb/24/race.eu>
- 45 キムリッカ、p.478
- 46 Tamir, Y. (1993). *Liberal nationalism (Studies in Moral, Political, and Legal Philosophy)*. Princeton University Press, Kindle Edition, p. 6.
- 47 日本人のナショナリズムについては、田辺俊介編『日本人は右傾化したか』（勁草書房、2019年）を参照。
- 9章 「なんでもかんでもハラスメント」は不適切なのか?
- 1 白河桃子『ハラスメントの境界線：セクハラ・パワハラに戸惑う男たち』中公新書ラクレ、2019年、Kindle Edition, p. 3
- 2 白河、Kindle Edition, pp. 6-7
- 3 単なる政治家の数の問題ではなく、そのことがもたらす問題点については、前田健太郎『女性のいない民主主義』（岩波新書、2019年）を参照。
- 4 白河桃子『ハラスメントの境界線：セクハラ・パワハラに戸惑う男たち』中公新書ラクレ、2019年、Kindle Edition, p.98
- 5 白河、Kindle Edition, p. 106
- 6 <https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00304/031500078/>
- 7 仕事の世界における暴力及びハラスメントの撤廃に関する条約（第190号）、邦訳は厚生労働省 <https://www.mhlw.go.jp/content/10501000/001293633.pdf>。
- 8 渋谷秀樹、赤坂正浩『憲法1 人権（第8版）』有斐閣アルマ、2022年、Kindle Edition, p. 283
- 9 McGowan, M. K. (2019). *Just words: On speech and hidden harm*. Oxford University Press, Kindle Edition, p. 1.
- 10 三木那由他『言葉の展望台』講談社、2022年、Kindle Edition, pp. 61-62
- 11 池田喬「ただの言葉がなぜ傷つけるのか」『哲学』（69）、日本哲学会、2018年、p.18
- 12 日本語で読めるこうした議論については、江口聡「ボルノグラフィに対する言語行為論アプローチ」（http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/227/1/0140_001_002.pdf）や八重樫徹「抑圧的発話による規範の構成——M・K・マクゴワン の理論を中心に——」（『宮崎公立大学人文学紀要』2023年3月、pp.121-136）を参照。
- 13 ミランダ・フリッカー『認識的不正義』佐藤邦政、飯塚理恵訳、勁草書房、2023年、Kindle Edition, pp. 13-14

10章 誰かを優先することは不適切なのか?

- 1 倉持麟太郎『リベラルの敵はリベラルにあり』ちくま新書、2020年、Kindle Edition, pp.246-247
- 2 <https://digital.asahi.com/articles/ASP985CTXP93UPQJ017.html?pn=12&unlock=1#continuehere>

- 3 J・S・ミル『自由論』関口正司訳、岩波文庫、2020年、Kindle Edition, p.20
- 4 日本語で読める功利主義の入門書は、児玉聡『功利主義入門 ――はじめての倫理学』ちくま新書、2012年。特に「第4章 洗練された功利主義」を参照。
- 5 齋藤純一、田中将人『ジョン・ロールズ 社会正義の探究者』中公新書、2021年、Kindle Edition, p.78
- 6 「二原理」と呼ばれるものの、3つの原理が含まれていることに疑問を持つかもしれないが、実際に(2-a)と(2-b)の区別を強調する論者もある。たとえば Freeman, S. (2018). Rawls on distributive justice and the difference principle. In S. Olsaretti (Ed.), *The Oxford handbook of distributive justice* (pp. 13–40). Oxford University Press.。
- 7 齋藤、田中、p.77
- 8 異なる善の構想を有しているのに、なぜ人々はロールズの「正義の二原理」を受け入れるのだろうか。ロールズは、この問題に『政治的リベラリズム』(神島裕子、福岡聡訳、筑摩書房、2022年)で応えている。
- 9 朱喜哲『〈公正(フェアネス)〉を乗り越えなす』太郎次郎社エディタス、2023年、Kindle Edition, p. 46
- 10 齋藤純一、田中将人『ジョン・ロールズ 社会正義の探究者』中公新書、2021年、Kindle Edition, p. 82
- 11 Taylor, R. S. (2009). Rawlsian affirmative action. *Ethics*, 119(3), pp. 476–506.
- 12 ジョン・ロールズ『正義論 改訂版』川本隆史、福岡聡、神島裕子訳、紀伊国屋書店、2010年、Kindle Edition, p. 721
- 13 ジョン・ロールズ『正義論 改訂版』川本隆史、福岡聡、神島裕子訳、紀伊国屋書店、2010年、Kindle Edition, p.316
- 14 Pogge, T. (2008). *World poverty and human rights: Cosmopolitan responsibilities and reforms* (2nd ed.). Polity Press.
- 15 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQODK1445Y0U5A410C2000000/>
- 16 マーク・リラ『リベラル再生宣言』夏目大訳、早川書房、2018年

11章 「キャンセルカルチャー」「社会的制裁」は正しいのか？

- 1 <https://www.bbc.com/news/world-us-canada-55959135>
- 2 <https://apnews.com/article/eric-trump-cancel-culture-78f8e2fa29715e142a281bd6480c0782>
- 3 山口真一『正義を振りかざす「極端な人」の正体』光文社新書、2020年、Kindle Edition, p. 135
- 4 <https://digital.asahi.com/articles/DA3S16148039.html?unlock=1#continuehere>
- 5 Braithwaite, J. (1989). *Crime, shame and reintegration*. Cambridge University Press.
- 6 ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換(第2版)』細谷貞雄、山田正行訳、未来社、1973年
- 7 Fraser, N. (1990). Rethinking the public sphere: A contribution to the critique of actually existing democracy. *Social Text*, (25/26), pp. 56–80.

- 8 Clark, M. D. (2020). DRAG THEM: A brief etymology of so-called “cancel culture.” *Communication and the Public*, 5(3–4), pp. 88–92.
- 9 https://www.washingtonpost.com/lifestyle/cancel-culture-background-black-culture-white-grievance/2021/04/01/2e42e4fe-8b24-11eb-aff6-4f720ca2d479_story.html
- 10 https://www.washingtonpost.com/lifestyle/cancel-culture-background-black-culture-white-grievance/2021/04/01/2e42e4fe-8b24-11eb-aff6-4f720ca2d479_story.html
- 11 <https://www.vox.com/22384308/cancel-culture-free-speech-accountability-debate>
- 12 <https://www.vox.com/22384308/cancel-culture-free-speech-accountability-debate>
- 13 瀧川裕英、宇佐美誠、大屋雄裕『法哲学』有斐閣、2014年
- 14 <https://link.springer.com/article/10.1007/s10677-026-10542-2#Sec6>
- 15 <https://philpapers.org/rec/JANTMI-4>

12章 不適切な振る舞いをしたら、どう謝罪し、どう償うか？

- 1 日本語訳は、法務省人権擁護局「今企業に求められる『ビジネスと人権』への対応『ビジネスと人権に関する調査研究』報告書」(2024年)を参照しつつ、筆者が一部変更。
- 2 (国連総会決議 60/147)
- 3 古田徹也『謝罪論 謝るとは何をすることなのだろうか』柏書房、2023年、Kindle Edition, p.121
- 4 Roberts, R. C. (2017). Race, rectification, and apology. In N. Zack (Ed.), *The Oxford handbook of philosophy and race* (Oxford Handbooks). Oxford University Press, Kindle Edition, p. 519.
- 5 Smith, N. (2008). *I was wrong: The meanings of apologies*. Cambridge University Press, Kindle Edition, pp. 35–36, p. 38.
- 6 Smith, Kindle Edition, pp. 35–36.
- 7 <https://digital.asahi.com/articles/ASR242GYMR23UTFK01Y.html>
- 8 <https://digital.asahi.com/articles/ASS580HFYS58OHGB005M.html>
- 9 ヤス/パースは、必ずしも全ての集団的な罪を否定しているわけではない。正確には、Jaspers, K. (2001). *The question of German guilt*. Fordham University Press.、日本語訳は『われわれの戦争責任について』(橋本文夫訳、ちくま学芸文庫、2015年)など。
- 10 Roberts, Kindle Edition, p.519
- 11 Zehr, H. (2015). *The little book of restorative justice: Revised and updated* (Justice and Peacebuilding). Good Books, Kindle Edition, p. 14.
- 12 Zehr, Kindle Edition, pp.14–15

13章 「不適切な振る舞い」をどう回避していくか？

- 1 ロビン・ディアンジェロ『ホワイト・フラジリティ 私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか?』貴堂嘉之、上田勢子訳、明石書店、Kindle Edition, p. 203
- 2 真鍋昌平『九条の大罪(2) [第12審] 家族の距離④』小学館、2021年

おわりに

- 1 石田健『カウンターエリート』文春新書、2025年、Kindle Edition, p. 8
- 2 Lind, M. (2020). *The new class war: Saving democracy from the managerial elite*. Penguin Random House.
- 3 アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『アセンブリ 新たな民主主義の編成』水嶋一憲、佐藤嘉幸、箱田徹訳、岩波書店、2022年、Kindle Edition, p. 119
- 4 アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『アセンブリ 新たな民主主義の編成』水嶋一憲、佐藤嘉幸、箱田徹訳、岩波書店、2022年、Kindle Edition, p.121